すてきな本たち

～子どもたちとのふれあいの中から～

第3回

かけがえのない，子ども時代の読書

教文館
子どもの本のみせ ナルニア国
土屋　智子

今、ナルニア国では夏に行う「加古里子原画展」の準備に大わらわです。レジでお客さまにチラシを配布しているのですが、どの方も笑顔で受け取ってくださいます。『とこちゃんはどこ』をいとおしそうになでながら、「（子どものとき）何度読んだかわかりません。大好きでした。だからプレゼントにもこれを選んでいます」とおっしゃる方。また、「どうぞおいでください」と声をおかけすると、いっぺんに笑顔になり「とても楽しみです」とおっしゃる小学生連れのお母様。いろいろなチラシを店頭で配ってきましたが、こんなに明るく、好意的な反応は初めてと言ってよいでしょう。

子ども時代に心から楽しんだ本というのは、違うものですね。

私自身はというと、残念ながら私の子ども時代にまだ加古さんの本は出ていませんでした。でも、心の底から楽しんだ本はいろいろあります。その一つが『ドリトル先生航海記』です。洞窟に閉じ込められてしまった先住民の偉大な博物学者ロングアローをドリトル先生が救い出すシーンや、お話の最後に、ドリトル先生一行が巨大な海カタツムリの殻に乗り込んで故郷に戻るシーンなど忘れがたい場面がたくさんあります。数年前に、再読する機会があり、読み始めた途端、当時の感覚がありありとよみがえってきました。

店内でも、本の世界に入りこんでいる子どもの姿を、よく見かけます。低い棚の前に膝をついて絵本を読みふける子、テーブルにひじをついて頁に見入っている子、そこには何かにひたり切っている、ある雰囲気が漂っています。

「子どもたちよ　子ども時代を　しっかりと　たのしんでください。おとなになってから　老人になってから　あなたを支えてくれるのは　子ども時代の『あなた』です」というのは、二〇〇一年に杉並図書館で行われた「石井桃子展」に石井さんが寄せた言葉です。残念なことに四月二日に石井さんは旅立たれましたが、子どもに注がれたこの暖かいまなざしを心に置いて、子どもと本を結ぶ仕事を続けていきたいと思います。

『ドリトル先生航海記』
ヒュー・ロフティング＝作
井伏鱒二＝訳
岩波少年文庫
1960年，新版2000年

つちや　ともこ　教文館 子どもの本のみせ ナルニア国店長。公立図書館員、日本図書館協会・児童基本蔵書目録作成委員会（非常勤）などを経て現職。